

そえじまたねおみ

【近代外交の先駆者 副島種臣】 中編

<対清・韓、外交>

副島のもう一つの大きな成果は対清外交であった。当時、日本と清国の間には台湾と朝鮮に関する問題が存在していた。台湾問題とは、明治四年、沖縄人五十数人が漂流して、清国領とされていた台湾原住民の生蕃（せいばん、台湾の高砂族のうち、漢民族に同化していなかったものを指す）に殺された事件。朝鮮問題としては、日本の維新成立後、我が国の朝鮮政府に対し、新たに善隣友好の申し入れに対し、朝鮮政府が拒絶したが、その背後に清国の力が働いている現状があった。

副島は、表向きの理由は明治四年に結んだ日清修好通商条約の批准書の交換の為の特命全権大使としてであったが、真の目的は台湾と朝鮮問題に対する「清の真意」を探らんが為であった。しかしこの時、清と各国との間では、清国皇帝との謁見問題が解決できず、諸問題の停滞の原因となっていた。清国政府は外国使臣との謁見の礼式において、各国の公使と意見一致に至らず、国書も捧呈していなかった。各国の立札に対し、清国は昔ながらの三跪九拝（さんききゅうはい）を主張してやまなつた。西洋諸国とアヘン戦争で痛い目に合っても、気位だけはむやみに高く救い難い中華意識を捨てず、各国にあくまで朝貢的（ちょうこうてき）な臣下の礼を押しつけようとした。



注) 三跪九拝（三跪九叩頭とも言う）

1. 「跪」の号令で跪き、
2. 「一叩」の号令で手を地面につけ、額を地面に打ち付ける。
3. 「二叩」の号令で手を地面につけ、額を地面に打ち付ける。

4. 「三叩」の号令で手を地面につけ、額を地面に打ち付ける。

5. 「起」の号令で起立する。

これを計3回繰り返すので、合計9回、「手を地面につけ、額を地面に打ち付ける」こととなる。

今の支那もこの思想は抜けていない。そこに副島は乗り込み、外国公使に三跪九拝の礼を強要することは全く無礼であり、言語道断であること、また大使・公使の別なく同一に扱い、北京に到着した順をもって席次にすることは国際儀礼に反することを諄々と説いた。しかし頑冥固陋（がんめいころう）な清国政府は現代の支那と変わらずこれに耳を貸さなかった。約一ヶ月間、両者のやり取りが続いたが、清国は少しも態度を改める気配を見せなかったため、副島は断然帰国を通知したところ、清は急に折れて、遂に副島の説を承諾したのであった。

清が各国大公使に対等の謁見儀礼を認めたのは、全く副島一人の尽力によるものであった。副島は清国に対し日本国家の名誉を損ねることなく、しかも各国公使の感謝と絶賛を浴びるとともに、当の清国政府すらも脱帽させ、より深い尊敬も勝ち得た。

一方、台湾と朝鮮問題については謁見問題で見事な手腕を発揮しながら北京駐在の柳原前光（正光）公使に清国政府との会議を命じ、台湾・朝鮮に対する清国政府の「肚」を探らせた。結果、台湾問題に於いては、日本人を殺害した生蕃の住む地域は化外（けがい）の地であり、清の統治範囲外であり、従って生蕃が何をしようとするとは無関係であり、それ故生蕃に対し、いかなる行動も日本の自由であると認めた。

朝鮮問題には柳原が、朝鮮は清の属国であるかないかを問うたのに対し、清国は内治外交に関して、清は少しも関係ない、つまり属国ではなく独立国であることを認めた。あくまで属国として宗主国の立場に立ちながら、表向きの建前としては日本にそう断言したのである。即ち、朝鮮と台湾に対し日本が如何なる行動をとろうと清は無関係と言い切ったのだ。この言質（げんち）を取り付けるのが副島の訪清の大目的だったのである。副島は柳原を使い見事に成功したのである。

<征韓論と副島>

明治期最大の外交問題は条約改正問題と共に朝鮮問題であった。それは日本民族にとっては死活問題だったのである。それ故にこの問題を巡って日清・日露の二大戦争が行われたのである。

注) 条約改正問題

江戸幕府が安政5年(1858年)にアメリカ合衆国、ロシア、オランダ、イギリス、フランスと結んだ通商条約(安政五カ国条約)は、1.外国に領事裁判権を認め、外国人犯罪に日本の法律や裁判が適用されないこと(治外法権)。2.日本に関税自主権(輸入品にかかる関税を自由にきめる権限)がなく、外国との協定税率にしばられていること。3.無条件かつ片務的な最恵国待遇条款を承認したこと。などの諸点で日本側に不利な不平等条約であった。

副島は朝鮮問題の重要性を誰よりも深く認識しており、是非とも自分の手でこれを解決したいと思っていた。この問題の解決は、清国を抜きにして考えられなかったのが、問題を複雑にしていたのである。朝鮮がわが国の度重なる友好の申し入れを無礼と侮辱の限りを尽くし拒絶してきたのも、背後に清の後押しがあったからである。その結果、副島は柳原に策を与え、清国の表向きの「清は朝鮮の内治外交に無関係」との言質を取りつけ、いよいよ朝鮮問題に乗り出そうとした恰(あたかも)その時、内閣の閣議にもち上がったのが、いわゆる征韓論である。

明治六年の春頃に至っては、公然と日本を「無法の国」と呼ぶに至っていた。この時副島は清国主張中であつたが、外務少輔(しょうほ=事務次官)の上野景範(かげのり)は、最早ここに至っては、我が居留民を引き上げるか、武力をもって朝鮮を打ち、条約を結ぶかの何れしかない、との意見を内閣に上申した。副島も朝鮮に対する意見は「征韓は無名(大義名分の無い)の帥(すい=戦争)にあらず。朝鮮の日本への侮辱無礼は問罪の帥をおこすに値(あた)いす」……とゆき着く先は征韓の他なしと見ていた立派な?征韓論者であつた。今日まで征韓論は種々誤解が多く、武断派の大義名分の無い対朝鮮武力行使と速断する人が多いが、そのような単純なものではない。副島ほどの学問のある道義心の高い人物が、征韓が大義名分に背かずと信じるに至ったことを我々は注目しなければなるまい。パークスに対し、またマリヤ・ルース号事件に於いて、あるいは清国に対して見せたような毅然たる外交姿勢をもつ副島にとって、もう取るべき道は征韓しかないと思つたのは当然であつた。

であり、所謂（いわゆる）帝王学の師傅（しふ=かしずき、世話し、教え導く役）である。人物・学問ともに最も優れた者をして、初めて担い得る、この上なき重要な勤めであった。明治天皇の御信任が如何に深かったかを窺い知ることができる。

天皇を中心に仰ぐ我が国の伝統では、帝王学の重要性は昭和天皇に御進講した杉浦重剛（しげたけ）を見ても納得せざるを得ない。今後の日本が心配である。副島という人物の赤心を示す逸話を次回に学びたい。

平成28年7月24日

志雲会塾長 有馬正能